

ハンガリーの図書館事情

An Account of Hungarian Librarianship

堀内 郁子

Ikuko Horiuchi

Résumé

The most significant stage in the development of Hungarian librarianship has been reached with the emergence of a new socialist system of libraries after the World War II. Before that period Hungarian librarianship was so poorly developed that they had to undertake two difficult tasks to eliminate backward conditions, namely, to meet quantitative demand in library facilities and qualitative leveling up of new socialist librarianship. After two decades of hard and vigorous work, remarkable progress was brought about by the interplay of many factors, of which the three most important were: (1) Transformation of social life by a revolutionary transition from capitalism into socialism; (2) recognition of traditions of the past; and (3) stimulation by observing achievements and experiences of foreign countries.

The majority of Hungarian libraries were built into networks planned to form part of major and more effective organizational system. With their force combined they are capable to perform their complex tasks with greater efficiency than by their individual efforts. Among the three main groups of libraries, learned and special libraries, public libraries, and school libraries, the first group with oldest and largest libraries made the most rapid development. The second group is the largest in number. The third group began to develop later and at a slower pace than other groups. These groups depend much on the co-operation of such institutions as the National Board for Librarianship, Centre of Library Science and Methods, Hungarian Book Buying Centre, etc. For studying Hungarian librarianship, the most useful information can be gained through *Hungarian Library Directory* published by the Centre of Library Science and Methods.

(Japan Library School)

は し が き

- I. 革命後の図書館の推移
- II. 図書館行政・機構
- III. 図書館員の教育
- IV. 館種別図書館の状況
 - A. 学術・専門図書館

B. 公共図書館

C. 学校図書館

D. 個人の蔵書

V. 資料の収集と整理

む す び

は し が き

世界各国の図書館事情のうち、これまで日本でもっともよく知られているのは米国、ついで英国のものである。独、仏、伊等については、たまに個々の図書館について断片的なことが紹介されたりするが、総体的な図書館組織とか全般的な図書館事情はあまり知られていない。ソ連についてはロシア語文献の翻訳、たとえばレーニン図書館の百年史や、ソ連科学アカデミー図書館の創立250年を記念しての歴史と現状に関する資料が訳出され、また米ソの文化交流の試みによって米国人の訪ソの報告などが入手できるので、それらの文献からかなりうかがい知ることができる。その他の国の図書館事情については、これまでほとんど全くといっていい程日本には紹介されなかったが、この程日本図書館協会より「世界の図書館」という本が出される由で、同書によって諸外国の図書館事情が明らかにされることと思われる。この稿では、東欧の社会主義陣営に属する国々のうち、ソ連を除いては最も図書館が発達しているといわれるハンガリーだけについて、やや詳しくしらべてみることにする。いわゆる鉄のカーテンの向う側の国々の図書館組織とその運営の典型的なものとして同国を選んだわけであるが、この稿を草することとなったもう一つの動機は、昨年ハンガリー国立図書館学センターが図書館要覧の新版¹⁾を出版し、幸い日本でもこれを入手することができたため、同国の図書館事情がかなり明らかになったことにもよる。

近頃は政治的な面で米ソの歩み寄りが著しく、政治的指導者の敵対的ムードは緩和されたが、両陣営の一般人のものの考え方はやはりかなりちがっており、図書館に対するアプローチも異っているようである。ここでは色々な立場から述べられた文献をしらべることによって、できるだけ客観的にこの国の図書館事情を述べることを心がけた。

I. 革命後の図書館の推移

ハンガリーは欧洲中央部、ドナウ川流域にある人民民主主義国で、面積は約 93,060 平方メートルで、日本の1/4 あまり、人口は約 1 千万人で東京都の人口とほぼ等しい。海をもたない内陸国で、北はチェッコ、東はルーマニアとソ連、南はユーゴ、西はオーストリアに接する。アジア人種のマジャール人が、9 世紀ごろ移住してきて建てた国で、1506年にオスマン・トルコに占領されるま

では強大な王国であった。17世紀にはオーストリアの統治下に入り、1867年、オーストリア・ハンガリー戦争で、オーストリア・ハンガリー帝国が成立した。第一次世界大戦では、同帝国はドイツと同盟して連合軍と戦ったが、1918 年 11 月革命が起り、共和国を宣言した。しかし、1920年に再び王政が復活した。第二次大戦では、ドイツ・イタリア側につき、対ソ戦にも参加したため、ドイツ軍の退却とともにソ連軍に占領され、国土戦場化の悲劇を経て、東ハンガリーに臨時政府が成立した。1946 年 2 月、王政を廃して共和国となり、45 年 2 月に人民共和国が成立した。ソ連共産党第20回大会以来の非スターリン化の影響と、ラコシ、ゲレ等政府首脳部の失政に関連して、ブダペストで反ソ、反政府の動乱が起った。2 ヶ月にわたる暴動はソ連軍の出動と、ソ連軍を背景とするカダル政権の出現で鎮圧された。経済的にはおくれた農業国であったが、現在では工業国として中進国家に発展した。社会文化的には、動乱後しばらくは反ソ、反共的な空気が残って不穏な気勢であったが、カダル政権の緩和政策、非スターリン化の促進などで、次第に安定した。

はじめにふれたハンガリーの図書館要覧の序文によれば、ハンガリーの図書館発展史上もっとも重要な段階は、新しく図書館の社会主義的組織が出現した時にはじまるという。それ以前の図書館は誠に貧弱で、国際的水準から見るとはるかにおくれていた。ハンガリーの近代図書館界の先覚者であり、理論家で、ブタペスト市立図書館の館長であった Ervin Szabó はその状態を憂慮し、彼の時代に一般的に受け入れられていたドイツ式図書館方式を排して、もっと技術的に進んだ国々、たとえばイギリス・アメリカ等の、特に後者の図書館方式を取り入れて、ハンガリーの図書館を再編成すべきであると主張した。更に彼の図書館に対する真に意義のある貢献は、既に革命前の時代に勤労大衆の立場から図書館サービスのあり方を考えた事、当時の支配階級である資本家や地主の利益に奉仕するのではなく、労働者、農民、知識人や学者に奉仕することが大切であると考え、その考えを鼓吹し、実践したことにある。しかし、二つの大戦の間の混沌たる時代には、彼の進歩的な思想は、彼を中心とするごく少数の協力者の間にかろうじて存続していたのみで、国も、地方も、都市も、村も図書館を近代的な教育の機関に発達させるためには何のなすところもなかった。第二次大戦後人民共和国が成立してからは、文化的革命も急速に進行し、図書館に関する政策が打ち立てら

れ、図書館組織を確立し、各種の図書館網を作り上げた。図書館の作業を組織化し、業務分担を明確にして、社会の要求に応えられるように整備したので、新しい社会主義社会において、ラジオ、テレビ、演劇、映画等多くの社会教育的手段の中で、図書館は最も有効なものとして高く評価されるようになった。

このような図書館の発展をとげるまでには二つの面で大きな困難を克服しなければならなかった。第一は量的な面で、たくさんの図書館を一時に作らなければならなかったことである。村の半分以上には図書館が全然なく、都市の図書館は小さく、それも中心部にあるのみで、周辺部には全然図書館サービスがゆきわたらなかった。しかも第二次大戦では国土が戦場となったため、それまでにできていた小さい村の図書館、学校図書館、工場や労働組合の図書館などがひどく破壊され、学術図書館や専門図書館も損害を蒙った。したがって、あらたに図書館を建設することと、過去の怠慢、非効率を改めることと、戦禍による破壊から復旧することを、同時に、しかも短期間に遂行しなければならなかった。

第二の困難は質的なもので、これは量的なものより更に厄介であった。しかし文化革命の面でも英雄的な努力が払われ、新しい社会主義的図書館の型を確立し、組織、機能等を明確に規定し、図書館間で主題分野の分担を定める等、質的向上の基礎を固めることにも成功した。

以上は *Hungarian Library Directory* の序文によったもので、この序文はハンガリーの図書館当局者が書いたものであるから、自画自讃の傾向があると思われるかもしれない。しかし、共産主義政治を嫌って米国へ亡命した人々も、ハンガリーが共産主義国になってから、教育、文化政策の確立、遂行に非常な努力を払い、その面で著しい変化を起したことは認めている。たとえば、ブダペストの公共図書館に2年間働いた経験を持つ新聞記者で、1957年米国に亡命し、同国のある公共図書館に勤務しているという Michael Keresztesi は次のように書いている。

“..... As far as libraries and culture are concerned, the Communist regime, despite its horrors, distortions, restrictions and coercive methods, must be given more credit than the Horthy regime, which ruled Hungary for 25 years. The semi-fascist Horthy regime did very little for the educa-

tion of the masses. The Communists, on the other hand, gave the people a wrong kind of education, but it was an education. What I want to say is: Communist indoctrination did tremendous harm, but it did something good, too..... This should be admitted for the sake of truth.”²⁾

もしこの亡命者が書いているように、ハンガリーでは悪い教育が行なわれたとしても——何がよい教育で、悪い教育とは何に対して悪いのか、大衆自身悪い教育と思って迷惑したのかどうか、大いに疑問はあるけれども——革命前のホルチー政府が何もしなかった時代とは異なり、強力に教育の普及がすすめられ、図書館も社会教育の場として活用されるに至ったことはうかがえる。日本の図書館界をかえりみると、昨今の不況ムードで、非生産的な図書館は、いかなる財源によって維持されているものも、予算をきりつめられてなま殺的な状態にあり、中には不景気な企業体の図書室は全然とりつぶされてしまった例もある。図書館に対して何もなされないという点ではホルチー政権下の状況に似ている。それはさておき、ハンガリーのみならず、社会主義国の図書館に共通する特長は、国の統制下であって、中央集権的組織をもち、国家の目標達成、活動の標準化をめざして努力し、図書館網はコミュニケーションの直接的なチャンネルとして国の政策を周知徹底させるための有効な道具となっていることである。

別のハンガリーよりの亡命者が、鉄のカーテンの向う側の図書館・情報サービスについて書いた一文があるが、この中で自由諸国の図書館サービスとハンガリーのそれとを比較して次のように述べている。³⁾ ちなみにこの筆者は1956年の動乱の際にハンガリーを脱出するまでは、ハンガリーの化学工業・動力省に属する技術計画研究所の図書館長ならびにドキュメンテーション部門の長をしていた人で、亡命後はオランダのヘーグに在住し、欧米の自由主義国の図書館事情にも通じている人である。

共産主義的図書館の実際と自由諸国のそれらとをくらべると、二つの大きい相違が見出され、一つはイデオロギー上の相違、他は図書館やドキュメンテーション・システムの機構編成上の相違である。イデオロギー的には、共産主義国では“いかなる人からも学ぶことができ、すべての人から学ばなければならない”という教訓を実践している。大衆的な毎日の新聞や週刊誌等では自

ハンガリーの図書館事情

由諸国の科学技術の成果をなるべく低く評価したり、共産主義側の成果をほめたたえるのに一生懸命であるとはいえ、陰では、図書館や研究所の内部で西側の科学技術の出版物を細心の注意をはらって分析し研究している。ところが西欧の図書館や研究所を訪れると、共産主義国は我々よりは2、30年はおくれているというような身びいきな発言をきくことが多い。スプートニクの打ち上げが成功していらいこういう意見も多少変化して来たが、鉄のカーテンの内部では決してこういう優越的なムードはない。たとえば、ハンガリーでは、自国にくらべれば明らかにくれた国であるルーマニアやブルガリアの文献を、ソ連や西欧、米国のそれらと同じように徹底的にしらべている。最も狂信的な共産主義者の技術者でも、他国の成果を学ぶ時は少しも政治的偏見をさしはさまない。“他人のあやまちからも学ぶことができる”というのもさきの教訓と関連したもので、あらゆることを自分達の進歩発展のために役立てようという意気込みが見られる。

共産主義国の情報サービスの組織は中央集権的で、経済産業の機構と対応している。一方西洋諸国では、個々の機関はそれぞれ独自の活動をし、諸機関の間の連絡調整は行なわれないのが普通である。それぞれが担当する分野が重複したり、重要な分野がどの機関からも顧みられていないというようなこともある。上部機関が個々の機関の活動範囲を明確に規定していないからである。結論としてこの筆者は次のように述べている。図書館や情報サービスにおいて、設備とか技術的な便利さというような点では西洋側がすぐれているが、強靱さ、活気、心の広さ（共産主義国についてこの言葉はこっけいにきこえるが、この一点については本当にそうなのである）について言えば、共産主義国の方が優れていると思うと。

これら亡命者の書いたものには、勿論共産主義国の図書館の不便さ、欠点も述べられていて、西洋の自由主義からの影響を遮断するために、外国の資料はソ連のものだけが一般読者に公開され、マルキシズムの考え方とあいれない著述は全部禁止され、ブダペストの米国公使館の図書館に出入した大学生は大学から除名されるというようなことも述べられ、思想統制、言論の自由のなさを非難している。

ハンガリー図書館にとっては純粋の第三者であるスエーデンの図書館員が、ハンガリー図書館を訪問した報告⁴⁾もあるが、これには特に東西の比較とか批判めいたことはなく、印象記風であるが、筆者が訪れた限りの図

書館からはいずれも好印象を受けた模様で、“この国の図書館員達は国境を越えての図書館協力に熱心である”と結んでいる。

ではハンガリーの図書館の当事者達は自国の図書館をどのように見ているのであろうか。さきに言及した *Hungarian Library Directory* や、代表的な図書館雑誌 *Magyar Könyvszemle* の記事等にもとづいて、革命後の図書館の推移をたどってみよう。

1945年から1948年あたりまでの最初の数年は実験的な時期であったし、1949年から1956年までは政治的、社会的に不安定な時期であったため、図書館事情も不安定であったが、1957年以降は着実に発展の傾向を続け、利用者が増加しつづけるのみでなく、資料に対する要求が量的にも質的にも増大した。第二次大戦以前の反革命の時代には、学術専門図書館の数は1,008、村や農民、労働組合等の図書館の数はあわせて3,147であった。ところが1963年の統計によると、学術専門図書館は1,624、村や労組等の図書館は9,909となり、これらの図書館の蔵書数は1,300万冊で前の時代の26倍になった。質的には、戦前には不便な場所にあり、開館時間も短かく、閲覧者に便利な時間にあいてなく、蔵書は古くさく極めて貧弱であったから、ごく限られた少数の人が図書館を利用するのみであった。近頃では図書館を持つということは、利用者の心の形成を助け、社会主義思想を強め、一般教養ならびに専門知識を深め、人格を豊かにすることに役立つ。ここに図書と図書館の力がある。1963年現在人民1人あたり4冊の本が備えられ、年間増加冊数は約400万冊で、利用者は年々7%ずつふえている。このように図書館が量質ともに発展したことは、色々な要素が作用しあって実現したものであるが、その最も重要な要素は、(1) 社会生活のあらゆる面で資本主義から社会主義に移行したこと、(2) 保存すべきものも、捨てざるべきものも含めて、過去から受けついだ図書館遺産、(3) 外国の図書館の経験、成果がハンガリーでの新しい図書館づくりによい刺激となったこと、等である。

第一の点については、農地改革と学校を国営にした事が過去の封建の遺制を拭い去るのに効果があり、民主主義の発展を助けた。銀行、工業、商業を国有としたこと、および農業の急激な変化によって社会主義建設の基盤がかためられた。これらの改革は当然社会構造をかえ、社会生活の様式をかえた。高度経済成長というのは我が国の池田内閣のうたい文句であったが、この国でも同じことが違った形態と内容で行なわれた。産業の急激

な発展で、工業労働者の数がふえ、農業の社会主義的再編成と機械化の促進により農業人口が減少した。その結果都市人口がふえ、農村人口がへった。賃金労働者がふえ、全般的に国の収入が増し、国民1人あたりの収入もふえた。労働時間を規制することによって余暇をふやし、小、中、高校の教育年限をのばし、教育内容を改善し、マスコミュニケーションのネットワークを作り、映画、演劇、講座、博物館、展覧会等を盛んにして、人民の文化活動を刺激し盛んにした。このような社会生活の変化は、図書館のあり方にも再検討を加える必要を生ぜしめた。図書館の方針も社会の変化、社会の要求に応ずるように作りかえられ、それにつれて図書館の経営、サービスもかえてゆかなければならなくなった。マルクス主義的政治のイデオロギーの要求は、図書館の蔵書内容および図書館員の働き方に影響を及ぼした。産業経済の急激な発展は、科学技術の研究を促し、専門図書館の拡充、科学情報サービスの向上を要求した。

社会主義革命の大きな目標の一つは、人民の教育程度、一般教養の程度を高めることであるが、そのためには公共図書館の発達を促進することが必要となり、そのための綿密な計画を樹立した。その計画に従って市町村や労働組合で作った公共図書館は創意工夫をこらして努力を続けたので、地域の大切な教育機関となるまでに10年とはかからなかった。

社会主義革命が図書館の現状に及ぼした影響は重大かつ決定的であったが、過去の遺産として受けついで革命前からあった図書館も現状を形成するのにある役割を果たしている。これらの図書館は資本主義社会の要求に応じて作られたもので、殊に町村立公共図書館、工場所有者や地主の作った図書館、教会の図書館等は資本家に奉仕する性格をもっていた。大会社に属する大きい専門図書館や、学術図書館も多かれ少なかれ似た性格をもっていた。しかし社会主義的図書館の方針が定まり、基礎がたたまると、一部の国立級の大図書館、たとえば National Szechenyi Library, Library of the Hungarian Academy of Sciences, Library of Hungarian Assembly, the Library of the Central Statistical Office 等は、これまで行なって来た業務、蔵書、人員等を殆んどかえずに新しい体制に移行した。組織を改善し、サービスを近代化し、蔵書の範囲を拡げ、新しい作業方法を導入して、この国の変革した図書館組織の中に融合していった。これらの図書館以外の多くの専門図書館は徹底的に改組するか新しく作るかしなければならなかった。

たとえば Hungarian Central Technical Library and Documentation Centre や Central Library of the University of Economic Sciences は改組によって現在のようになった。Károlyi Mihály National Agricultural Library and Centre for Documentation や Central Library of Education はいくつかの図書館を合併して作った。新しく作られた図書館の例としては、State Gorkij Library や Miskolc にある Central Library of the University of Heavy Industry 等がある。各地域にあるもっと規模の小さい専門図書館の大部分も全く改組しなければならなかった。なぜならば、第一に蔵書が古いこと、または戦禍に遭って使いものにならないこと、第二にあたに生じた生産分野とか新設された研究所等は、近代的な専門図書館サービスを要求したため、旧態依然の図書館では役に立たなくなったこと等による。学術図書館ではブルジョワの過去の遺産がかなり役に立ったが、専門図書館では役に立つ部分が極めて少なかったというのはこのような理由による。そのため専門図書館は他のどの館種の図書館よりも早く up-to-date な蔵書をきずき、新しい図書館サービスをはじめた。

過去の遺産の一部に社会主義の原則に立つ図書館があった。これはブルジョワの図書館にくらべれば数にすれば僅少であるが、ハンガリーの近代的ライブラリアンシップの発展のためにはずっと大きな役割を果たした。前述の Ervin Szabó とその同調者を指導者として、労働者や農民は自分達の手で労働組合図書館や読書サークルを作った。これらは現在の公共図書館組織のメンバー・ライブラリーの先駆となった。

新しい図書館の方針をたて発展させる上で、よい刺激となり役に立ったもう一つの要素は諸外国の図書館の成果であった。根本方針をたてるには主として社会主義国を手本とした。ソ連の援助は最も重大であったが、チェッコ、ポーランド、東ドイツ、ブルガリア等からも若干の援助を受けた。各種図書館サービス等に関する貴重な知識を英、米、独、仏、伊等の先進国やオーストリア、ベルギー、デンマーク、フィンランド、スウェーデン、スイス等の小国からも吸収した。直接体験したり文献を通して学んだ。外国図書館事情の学習は、自国の図書館の成果を評価し、新しい趨勢を知り、刺激を得ることに役立った。過去20年間における外国との交渉は不安定で、1949-55年の期間はソ連からの影響が非常に強く、資本主義国は勿論その他の国との交渉も殆んどなかった。そ

の後の政策の変更で、資本主義国と社会主義国とを問わず、ハンガリーの国情に適用することのできる外国の成果はどんどんとり入れるようになった。しかしまだどちらの方向にも直接交渉は比較的少ないので、もっと国際関係を緊密にすべく、資料の交換等を手はじめに、各国に呼びかけをしている。

II. 図書館行政・機構

革命前には図書館は色々なオーソリティの下で運営されていたが、現在では1956年3月に制定された図書館法により、すべての図書館は行政的には Minister of Public Education の監督下にある。図書館組織に関する原則とか構造については、1952年の閣議における決議(第2042号)と上記図書館法およびその施行規則によって定められている。これらの法規によって図書館の主なカテゴリとその監督官庁を定め、類似のコレクションを持つ図書館はネットワークに編成し、各ネットワークにはそれぞれ中央図書館を作ることを基本方針とした。しかしいかなるネットワークにも属さない図書館もあり、その中には重要な個人の蔵書が公的に維持されているもの、美術館や体育館の図書館等が含まれている。図書館の主なカテゴリとは、国立図書館、学術・専門図書館、公共図書館および学校図書館である。このようなわけ方は理論的なものではなく、これまでの習慣にもとづいている。図書館法は更に各種類の図書館のカバーすべき主題分野、資料収集方針、整理その他の業務内容を規定している。また図書館員の任免、予算、設備等に関してもきまりがある。ゼチュエー国立図書館に関する特別の章をもうけ、この館の仕事の内容と範囲を定めてある。種類別のネットワークの数は次の通りである。国立1、科学技術関係図書館13、地方公共図書館20、労働組合図書館17、学校図書館1。図書館をネットワークに組織するということは、社会主義的図書館が創造したことではなく、ある種の図書館では以前からネットワークを作っていた。たとえば総合大学の本館と学部図書館は一つの組織として機能を果たしていたところがある。しかし社会主義体制の下においてのみネットワークのしくみは一般原則となり、一般的な組織の形態となり得る。ネットワーク組織の長所は、類似の機能をもつ図書館は、それがどういう対象に奉仕する図書館であっても、一つのネットワークに結合することによって、広い視野に立ち、組織的な仕事をし、蔵書やサービスの面等で長短相補うことができることである。メンバー図書館間で能率

のよい合理的な分業ができ、連絡調整がやり易い。インター・ライブラリー・ローン等で1図書館の限界を越えた機能を果し、図書館方針がややまった方向へ進むことをふせぐことができる。日本の場合この点が参考になるのではなかろうか。何故なら、個々の図書館内で行なわれている部分的な図書館技術については進んでいる面もあるが、諸図書館の組織、図書館間の協力というような点では進歩改善の余地が大きいからである。

社会教育省の諮問機関として National Board for Librarianship (図書館審議会) が設置されており、25人の指導的図書館員によって構成されている。この審議会は1953年に設立され、その法的地位は図書館法に規定されている。毎月会議を開き、12の委員会があり、この委員会には審議会のメンバー以外の学識経験ある図書館員が招かれている。12の委員会はそれぞれ次の分野を審議する。図書館学の原則、行政、収集、目録、分類、公的サービス、児童・青少年文献、書誌、ドキュメンテーション、資料の維持管理、図書館建築、および図書館員の養成である。この審議会のこれまでの答申は、図書館員、図書館および社会教育省にとって常に有益であった。

III. 図書館員の教育

図書館員の教育について簡単に述べれば、1948年にブダペストの Lóránd Eötvös University の言語・文学部ではじめて大学程度の図書館学教育が行なわれた。同時に、大図書館の館長や科学関係の司書のために、同大学の一学科として図書館学研究所が開設された。1951年には、公共図書館の急速な発達にともない、各規模の公共図書館の館長にも門戸が開かれた。教育内容は、科学関係の図書館員にも公共図書館の責任者にも満足のゆくようなものでなければならない。さしあたっては、図書館学の基礎的資料に通曉せしめることを原則とし、同時に各自に必要な専門的な分野を修めさせることとしてある。誰でもが共通に履習する学科目は、図書・図書館史、書誌学、図書館管理・運営法である。外国語の必要単位数は次第にふえて、ラテン語、ロシア語のほか現代の外国語2か国語を修めることが要求されている。また、4週間ずっと5週間ずつの実習を各2回おこなひ、更に最後の学期がすんでからまる1年間の実習をする。その上、第5年目の大学教育を修了すると、すべての学生は国家試験に合格しなければならない。図書館学研究所長は大学の教授であるが、講師には有能な現職の図書館員

や、各主題分野のエキスパートが選ばれており、理論と実際が分離しないように配慮されている。⁵⁾ 1963年には423人の学生がいた。同じ年にソ連では15,000人、チェッコでは369人、ブルガリアでは177人の学生が図書館学を修めていた。通信教育も行なわれているが、通信教育課程を修了するには6年間を要する。

IV. 館種別図書館の状況

A. 学術・専門図書館

学術・専門図書館は調査研究の機関で、情報センターをなす。現在のところその数はあまり多くなく、1,624で、全図書館数の10%にみたない。しかしこの中にはハンガリーで最大、最古の図書館、たとえば、National Széchényi Library, University Library of Budapest,

the Library of the Hungarian Academy of Sciences等を含む。最も急速な発展を続けつつある大専門図書館もまたこのグループの中にある。たとえば、Hungarian Technology Library and Documentation Centre や、Károlyi Mihály National Agricultural Library and Documentation Centre や Hungarian Medical Library and Documentation Centre 等である。最近数年間に専門図書館の数はやや減少した。これは多くの企業体の整理統合により、これらに附属していた図書館も合併したことによる。しかし蔵書数や、資料の貸出し数は増加し続けている。その発展の様子は1957年と1963年の統計を比較した第1表⁶⁾によってうかがうことができよう。

第1表. 1957年・1963年図書館統計の比較

Network resp. library	Number of libraries	Holdings in volumes	Yearly acquisitions in volumes	Items used on the premises	Items borrowed	Collaborators	
						Total	Full time employees
National Széchényi Library							
1957:	1	3,723,782	131,028	384,847	17,237	285	242
1963:	4	4,638,298	167,485	573,968	17,387	388	317
Network of the Hung. Acad. of Sciences							
1957:	36	1,432,005	55,756	159,985	55,620	136	103
1963:	45	1,647,721	80,141	217,626	120,678	193	144
University networks							
1957:	193	4,415,929	180,751	768,884	360,139	459	264
1963:	237	5,532,412	269,618	1,783,620	627,295	512	335
Network for the higher technical education							
1957:	152	1,345,836	64,262	163,081	120,299	276	104
1963:	149	1,430,315	240,010	360,559	231,418	419	117
Network for technology and production							
1957:	1,337	7,440,662	384,131	435,950	715,498	1,322	291
1963:	584	9,739,329	715,984	1,014,965	1,528,415	1,624	742
Network for agriculture							
1957:	141	842,307	50,458	115,024	171,234	268	126
1963:	164	1,101,956	83,688	226,311	394,366	362	224
Network for medicine							
1957:	248	778,295	34,363	234,021	189,530	288	55
1963:	420	964,860	91,699	511,104	299,271	560	162

前にも述べた通り専門図書館の分野は、他のどの種類の図書館よりも早く近代化し、発展をとげている。写真複写やマイクロ写真の設備は勿論、索引や抄録サービスも迅速で広い範囲をカバーしている。2,500 種類の専門雑誌の記事が抄録されている。図書館学の分野では *Express Information of Foreign Literature on Library Science and Documentation* があり、外国の図書館学関係60誌あまりの目次と重要な論文には短かい要約を付したものを出している。また翻訳のサービスも盛んで、ほとんどどの図書館でもやってくれる。国立工学図書館に翻訳センターがあり、いかなる翻訳をする場合でも、まずこのセンターに通知しなければならない。センターはすぐにすでに翻訳されているかどうかをしらべ、未訳であれば翻訳するように返事する。すべて翻訳したものは1部をセンターに送る。翻訳された文献はセンターで索引を作っていつでも使えるようにしてある。センターに通告せずに勝手に翻訳すると罰金をとられる制度になっている。科学アカデミーの電子計算機センターでは、ロシア語のハンガリー語訳、各種語形の語義的区分、語形論的ないしは文章論的分析というような言語学についての各種の研究がいまや着々と進行中であるという。⁷⁾ このように学術・専門図書館の分野での活動は世界的水準からみてもたちおくれてはいないようである。

B. 公共図書館

ハンガリーの図書館方針は、はじめから公共図書館におもきをおき、革命初期の段階では、公共図書館は、教育機関として大衆の教養を高めることを本務と規定していたが、その後、各地で急速に生産を高める必要に応じて、——実際に生産は高まったが——一般住民も生産向上のために必要な科学技術資料を要求するようになり、非常に高度な専門的な資料やサービスは学術・専門図書館にゆずるとしても、普通の専門図書館的サービスは公共図書館でも行なうようになった。1952 年の閣議により公共図書館に関する決定がなされて以後、順調に発展し、現在公共図書館の数は全図書館数の50%以上を占める。組織的には全国を19の州にわけ、各州には州の中央図書館をおき、その傘下に市町村図書館、分館、自動車文庫などをおさめ、1963年現在で合計5,261館ある。過去の図書館数と比較すると、1950年には1,710、1952年には3,375、1959年には4,579館であった。館数の増加に比例して、蔵書数、貸出し数も増加している。細かい数字は省くが、1957年から1963年までの7年間に、利用者数、貸出し冊数、館員の数等は約2倍、受入冊数は

5倍にも増加している。図書館のPRが徹底していることは、公共図書館のみならず、他の館種にもいえるこの国の特徴であるが、たとえば、さきにも引用したスエーデンの図書館員 Greta Renborg のハンガリー図書館訪問記によれば、Kaposvár という人口5万人たらずの都市には、中央図書館一つと12の分館があるが、市の目ぬきの場所10ヶ所に図書館のショーケースがおいである。裁判所の階段の踊り場のショーケースなどは、そこを通る人は誰も見すごすことができない。陳列は20日ごとにかえられる。図書館に関する案内、通知等を書いたプラカードが医院の待合室、事務所、学校等いたるところにおいてあるといった具合である。⁸⁾ 図書館の宣伝をするためには、ショウウィンドウ、ポスター、ラウドスピーカー、映画等あらゆる手段を用いる。それはちょうど西洋自由諸国でペプシコーラやマックスファクターの口紅を宣伝するのと同じくらい盛んであるという。⁹⁾ 図書館を通じての成人の啓蒙運動はこのように盛んであるが、児童に対する図書館サービスはまだ不十分のようである。独立した児童室を設けてある公共図書館はわずか47館しかなく、訓練された児童図書館員も不足している。児童のための資料も少なく、公共図書館の利用者の25%から50%は児童であるのに蔵書は15%しかない。学校図書館とともに、急速な発展が望まれる分野である。

C. 学校図書館

学校図書館の発展は、専門図書館や公共図書館の発展にくらべるとややおくれてはじまり、発展速度もややにぶい。したがって現在の教育的必要に充分こたえていない。殊に小学校の図書館が不十分で蔵書が少なく、収書や整理の方法も改善の余地がある。そこで学校図書館のネットワーク・センターである Central Library of Education は最近学校図書館の発達に力を入れはじめたので、次第にその成果が現われることが期待されている。

D. 個人の蔵書

個人の蔵書はこれまで述べた3種類の図書館とは全く違った性質をもつ。すなわち、所有者が利用するためのもので、公衆の利用に供するたてまえになっていない。しかしこれらは国の図書館組織から除外されているのではなく、組織の一部をなす。種々の読者の多岐にわたる複雑な要求に応ずるには、個人の蔵書であると、公の蔵書であるとを問わず、すべてを動員しなければならぬ。そこで一部の読者の非常に特殊な要求については可能な範囲で個人の蔵書が利用される。したがって

Hungarian Library Directory には個人のコレクションも主なものは載せてある。

V. 資料の収集と整理

この国では資料の収集は簡単である。出版事業は国営で一つの企業しかない。書籍の販売も中央化されていて国営の書店で販売されている。図書館の図書購入のためには、図書購入センターができていて、国内出版物は勿論外国の出版物も扱っている。図書を入手するのみでなく、製本、請求記号つけ、目録カード添付等のサービスも行なう。資料選択のためには解題つき図書リストをつくり、大図書館には隔週、小図書館へは月1回配布する。図書館員達はいつでも自由にセンターに来て、展示してある実物を見たり、資料の選択に関する相談をしたりすることができる。

購入のほかに交換による資料の入手も行なわれている。国際交換は盛んに行なわれ、National Szechenyi Library では40か国の230以上の機関と交換し、同図書館の資料の8%以上が交換による入手である。1923年以来国際交換センターというのができていて、ここで交換が行なわれていたが、1956年にできた法律で交換の分散化を定めたので、前記国立図書館のほかブダペスト大学図書館や、Centre of Library Science and Methods 等でも交換している。

ハンガリーではじめて十進分類表を使ったのは1902年で、前記 Ervin Szabó がこの体系をひろめるのに努力した。現在では主として UDC が使われ、ハンガリー語の簡略版もできていて、現在では第5版がでている。これは、マルキシズム、共産党、史的唯物論に関するところだけが、国際版と異なっている。¹⁰⁾ 図書館の理論と実務については、Centre of Library Science and Methods があって、新しい理論や技術の調査をしたり、特定の図書館でそれらを実験することを指導したりしている。個々の図書館から図書館員がセンターに来て相談したり、指導を受けたりすることができる。図書館員養成の施設がまだ不十分で、訓練された図書館員が不足している現状では、このセンターが重要な役割を果たしている。

む す び

以上でハンガリーの図書館事情のごくあらましを述べたが、個々の図書館の紹介は省いた。これらについては *Hungarian Library Directory* に細かいデータがでてい

るので必要のむきは参照されたい。ただし、41ページにわたる序文は英語で書かれているが、本文はハンガリー語なので、詳しい説明を理解するのは困難である。しかしよく出てくる術語や略語のリストに英訳がつけてあるので大体のことはわかる。与えられているデータは、図書館名、住所と電話番号、インター・ライブラリー・ローンの際に使う館のコードナンバー、監督機関、創立年、専門分野、特殊コレクション、目録と分類体系、閲覧座席数、館長名、館の出版物等である。よく完備したディレクトリーで米国の *American Library Directory* やドイツの *Jahrbuch der Deutschen Bibliotheken* 等に匹敵する。

ハンガリーの図書館事情を一言でつくせば最近20年間に急速な発展をとげ、非常に能率よく組織化して無駄のない活動をしているということであろう。我が国にもこの国の資料がぼつぼつ入って来ているし、国際交換の呼びかけの手紙なども来ているので、この国の資料の入手は困難ではないし、もっと密接な関係を保つことも可能である。そのためにこの小稿が何かのお役にたてば幸いである。

(図書館学科)

- 1) *Hungarian library directory*. Budapest, Centre of Library Science and Methods. 1965.
- 2) Keresztes, Michael. "Hungary: thought control in communist libraries: a memoir," *Wilson Library Bulletin*, vol. 35, Feb. 1961, p. 439.
- 3) Szebenyi-Sigmond, Judith. "Libraries and information services behind the iron curtain," *American documentation*, vol. 10, Apr. 1959, p. 108-15.
- 4) Renborg, Greta. "Pioneer 1964; reports on Hungarian libraries," *Library World*, vol. 66, May 1965, p. 267-70.
- 5) "Library development in Hungary," *Unesco bulletin for libraries*, vol. 10, Feb.-Mar. 1956, p. 35.
- 6) *Hungarian library directory*, *op. cit.*, p. xxxi.
- 7) Shaw, Jane A. "電子計算機と人文学," 日米フォーラム, vol. 12, 1966. 4, p. 37-8.
- 8) Renborg, *op. cit.*, p. 267-8.
- 9) Szebenyi-Sigmond, *op. cit.*, p. 110-1.
- 10) Csapodi, Csaba. "Die Anwendung der Dezimal-klassifikation in Ungarn," *Biblos*, vol. 11, 1962, p. 84-7.